

アイちゃんの衝撃発言で、少し唾然としてしまった…。

「ね、ねえ…だ、大丈夫？」

さすがにアイちゃんが心配して声をかけてきた。

お陰で気を取り直した。

「ミュキ…もしかして、ミュキのお母さん、ミュキを連れてきて…」

いやいやいや…それは無いと思う…。

事故のあと、一応は命を取り留めてはいたミュキ。

しかし脳死状態だったのだ。

脳死状態となると、あとは時間の問題で心停止してしまう。

そこでミュキの両親は、なにかいい手段は無いかと、各方面へ情報収集し、結果海外へと旅立って、それっきり。

その間ミュキは面会謝絶のまま、またなぜか病院側からはボクには情報が降りてこず、実際はどのようなことになっているのかが分からなかった。

あの事故から半年経ったあとに、ミュキが病院からいなくなったということ以外は。

ということで、色々と一人で考えて、どこかで生きていることにしようと、自分に思い込ませていた。

…そうすることしかできなかった。

そしてアイちゃんは、ボクのその時の様子を一番知っている一人だった。

そのアイちゃんが、そんなことを言い出したのだ。

…

「…ミュキが居るの？」

ボクは静かにアイちゃんに訊いた。

アイちゃんは少し間を置いて、

「ミュキは…実は…前から居たんだよ。」

？

どういう意味だ？

アイちゃんは続けてこう話した。

「ねえ、カスガくんはミュキのことをどう思ってた？ 近くに感じたりはしなかった？」

…！

もしかして、美優？

…

いや、そんなことはないはずだ。

まず顔とスタイルは…ミュキには申し訳ないけど、美優のほうが美人でセクシーなスタイルだし…

…

でもただ、背格好は一緒だし…顔も系統は一緒だし…声も似ているような…

…

「ねえ…ホントにわからないの!？」

アイちゃんが苛立たしく聞いてきた。

こんな感情的なアイちゃん…じゃ、やっぱり…

「もしかして…美優がミュキなの!？」

…

アイちゃんは目に涙を溜めて「うん。」と小さく頷いた。

…

ショックだった。

美優がミュキだったなんて…って、ちょっと待って。

なんでアイちゃんがそんなこと知ってるんだ…？

彼氏だったボクが知らなかったことなのに。

「実は…去年の9月ごろには、ミュキの意識は戻っていて、奇跡的に脳死状態から戻ってきてたの。でも、それまでの全ての記憶がなくなっちゃって…」

アイちゃんは説明を始めたが、ボクにはさっぱり全然わからない。

いや、あまりのショックで耳には入っていても、理解が出来てない…。

ところどころ…いや、中間の話は殆ど憶えてない…

「…それで催眠術の一種かなんかで、その専門の人が作り物の記憶をミュキに刷り込んで…それでミュキが美優になったの。」

…

…これまたショック…ホント、訳わからん…。

今日はショッキングなことばかりだ…

でもやっぱり…一番のショックは…

…ボクが「美優 イコール ミュキ」だということに気づけなかったこと…。

アイちゃんが色々気遣ってくれていたのか、ある程度気を取り直したときには、目の前にお茶が置いてあるし、アイちゃんがボクを後ろにぴったりとくっついていてくれた。

「…アイちゃん？もしかしてそのことを今日話しに来たの？」

ボクはなんとなく訊いてみた。

よく考えれば、いきなりアイちゃんがボクの部屋を訪ねてくる事自体、不思議なことなのだ。

アイちゃんはボクの背中にくっついたままこう答えた。

「それもそうなんだけど…。」

ん、それじゃ違う話もあったってこと？

「カスガくんの気持ちを訊きたかったの。」

…

「美優のこと…どう思ってるのかって…今これを訊いたら、話が逆になっちゃうけど…」

…確かに、今となっては答えようが無い。

…ミュキ…美優…

…美優！？

そうだ、携帯…！

ボクは思い出したように自分の携帯電話を見た。

…着信なし。

…メール受信もなし。

美優…どうしたんだろう…

いや、連絡が取れたとしても、今のボクにはどうしたらいいのかわからない…。

明日はボクの誕生日だというのに…今何時だろう…。

午後11時37分。

！

アイちゃん、どうやって帰るんだ！？

「アイちゃん！もうこんな時間だよ！？」

ボクはあわててアイちゃんに話した。

しかし…

「明日って、カスガくんの誕生日だもんね…」と、静かにアイちゃんは話しかけてきた。

そうだった…

そうなんだよ…でも美優…いや、ミュキは怒って帰ってしまったまま連絡が取れない…。

明日どうなるんだろう…。

いや、謝れば大丈夫…だけど、今はボクの方が大丈夫じゃなさそう…。

…明日からどうミュキに接したらいいのか…

「アイちゃん…明日どうしよう…美優…と約束してるのはいいんだけど、こんなこと聞いた後じゃどうしたらいいのか…。」

…

二人とも黙ってしまった。

ホントに大問題だ。

いや、ボクががんばって、ミュキを美優として見ていかないと…

今のミュキは、ミュキじゃなくて美優なんだから…。

「それよりも…ゴメン、また話がおかしくなっちゃうけど…『ミュキ』に対してはどう思っているの？」

アイちゃんは訊いてきた。

…

改めて考えると、ミュキの存在…ミュキへの気持ち、想い…

少し経ってから、ボクは口を開いた。

「なんていうんだろう…ボクはもしかしたらミュキの様になりたかったのかもしれない。」

さらに色々考えた…。

今後のためのヒントが出てくるかもしれない…美優とミュキ…今後をどうやって…

「前は、きっとボクの前に帰ってきてくれるって思ってた。ミュキが遠くに行ってから半年ぐらいまで。」

ボクは色々思い出していた。

あの頃のことを。

あの頃のボク自身を。

そして、あの頃のミュキへの想いを。

…

「確かに植物状態だったけど…ミュキ自身はあの病院にはいたことだし…実際生きていたし…。」

ボクの目には、自然に涙が溜まっていた。

「ミュキが遠くに行ってから…信じてた…信じてたけど…」

アイちゃんは後ろからボクに抱きつくような感じで、でも柔らかく包んでくれていた。

それがボクを余計に悲しい気持ちにさせた。

アイちゃんの体は小さく震えて、そして暖かかった。

「だから、せめてミュキが見ていた世界を見たくて、触れたくて…今のバイトに就いて…」

…

「いつの間にか…」

…ボクは酷く嫌悪感に陥ってしまった。

この時点で間違ってるって。

この先ボクが話そうとしたこと…それはミュキを…

…

「ミュキはホントに遠くの人に…なって…ボクの……ボクの中で…」

「もういいよ…カスガくん、もういいよ…」

アイちゃんはボクの背中に抱きついたまま、か弱い泣き声でそういった。

…

…気づいたら、朝になっていた。

アイちゃんの姿はなかった。

ベッドの上じゃなく、床の上で寝てしまったボクに、毛布をかけて帰ってしまったらしい。

テーブルの上を見ると、アイちゃんを書いたのであろう書き置きがあった。

…少々長い書き置きが。

「カスガくんへ。

まず、今日はいろいろと迷惑かけちゃってゴメンなさい。

でも、私はもうガマンできなかった。

このまま嘘をつき続けるのも、カスガくんのこれからをおかしくしてしまうのも。

もしこのことで、カスガくんとミュキがうまく行かなくなることになったら、私は実際どうしたらいいかわからないです。

でも、なんでもチカラになるから、なんでも言ってください。

今日はホントにゴメンなさい。

ふたりがうまくいきますように。

アイ」

…

アイちゃん…

ボクもアイちゃんと同じような立場だったら、同じ事するかも。

アイちゃんにお礼のメールでもしておこう。

ボクはふと携帯を見た。

！

ランプが点滅している！？

着信？メール？

僕が寝ている間にメールが1件あったようだ！

ボクはあわてて携帯を手にとった。

…

美優からのメールだ！

「件名：ハッピーバースデー！」

ボクはいろんな意味でドキドキしながら、メールを開いた。

…

そこにはこう書かれていた。

「とりあえず、朝一でおめでとう言いたくて。

とりあえず、昨日のこと、ごめんなさい。

でも、カスガが私のことをどう思っているか、正直わかりません。…」

…当然だよな。

あんな感じだと、きっと誰でも勘違いするもんな…。

「…でも、たぶん、昨日はたまたまだったんだと思って、見なかったことにします。」

とりあえず…ホッ…細かいところ言うと腑に落ちないけど。

「今日は予定空けてるよね？約束だったしね？

まさか…って、まさかねえ～。

ということで、5時に迎えに来てくださいな。じゃまたね！」

…はあ…。

まあ…文章の端々に、嫌味を感じるけど…とりあえず大事にはならなくてよかった。

でも…やっぱり…美優…ミュキ…

…実際会ったとき、ボクはどうしたらいいんだろう…？

いや、記憶がまだ戻ってないのであれば、ここは「美優」として見てあげないといけない。

でもそれが出来るかどうか、すごく自信が無かったりする。

…いや、やらなければいけない。

いつか、ミュキの記憶が戻るときまでは…。

…

そういえば、なんでミュキのお母さんが来たんだろう？

しかも来たと思ったら、いきなりヒステリックに問い詰めてきて、その後はいきなり帰ってしまった。

…そうそう！しかもその時には…「ミュキ」の声が聞こえたような…

あああああああ…わかんねえ…。

もしあの時の声の主がミュキならば…アイちゃんが来た後に来た美優は？

…もしかしたら、そのときに美優…いや「ミュキ」としてなにかボクに用があった？

…

複雑だ…複雑すぎてボクにはどうしたらいいのかわからない…。

…今何時だろう？

…午前9時30分過ぎか…。

うん、まだ時間はある、時間はあるぞ。

落ち着けカスガ…落ち着くんだ。

っていうか、余計なことを考えるな…考えるから訳わからなくなるんだ…

…って、余計なことなんかじゃ無いじゃん！

大事なミユキのことだぞ！？

…

って、堂々巡りだな、こりゃ…

…うん、こういう時は、TVゲームするに限る！

しかも内容の濃い、ハマりこみそうなヤツ！

…ということで、ボクはTVゲームをはじめた。

実は、先日中古で手に入れた格安で面白そうなゲームがあるのだ。

ジャンルはサウンドノベル。

こういう推理したり、謎解きなどするようなゲームが大好きなのだ。

で、肝心のタイトルは…

「おかまたちの夜」

見るからにおもしろそうなタイトルではないか！

なんとこれが、480円で売られていたのだ。

確かに知らないメーカーのソフトではあるし、聞いたことがあるような無いようなタイトルだが、これは期待できそうだ。

ボクは早速ゲーム機を起動し、この「おかまたちの夜」を始めることにした。

…

…2時間半後。

…

うん、まあ面白かったよ。この「おかまたちの夜」。

内容的には…要は7人のオカマたちが、仕事が終わったあとにホストクラブにて起こる騒動サスペンス。

いろいろな選択肢があって、いろんな話の分岐があって、当初の予定通り「これは！」と思わせるような展開ではあった。

しかし、どうがんばっても、どう脱線しようと、すべて同じエンディングに辿り着くのだ。

既に3回ほどクリアしているが、すべて同じエンディング。

いや、確かに3回しかクリアしていないけど、どれも全然話が違う内容で進んでいったのだ。

最初は、ホストを口説き落として…という順当な(?)ストーリーで。

次は、ホストをからかいまくった挙句にぼったくられ。

最後は、ホストを口説くと見せかけて、同じオカマを口説き落とし。

…こんなに違うストーリーなのに、結末は一緒。

「なんだかんだ気合を入れて、シンガポールへ性転換へ旅に」というエンディング。

…なんじゃこりゃ…

さすがにもうやってられなくなったので、このゲームはやめてしまった。

でもこのゲームの効果があり、朝に比べると格段に気持ちが軽くなったようだ。

うん、このままなら、土方ミュキ…じゃない、美優に会ったとしても、なんとか普通にいられそうだ。

そうそう、もうあれこれ考えるのはよそう。

きっと直接美優に合えば、ちゃんとこれまでどおり、仲良くやっていけるさ。

さすがにお腹がすいたので、その辺にあったカップ麺を食べ、落ち着いていた所為もあり、また昨晚満足に寝ていなかった所為もあり、いつの間にかそのまま眠ってしまっていた。

ブルルルルル…ブルルルルル…

ボクは携帯の着信音で目を覚ました。

どうもババ先の出版社からみたいだ。

今日はちゃんと休みにしてもらっていたのになぁ…なんとなく嫌な予感。

「はい、カスガです…。」

「あ〜カスガくんおつかれ！休みのところ申し訳ないね！」

あ〜斉藤さんだ…ホントに嫌な予感…。

斉藤さんは、ほとんど取材に出向くことが多い人なので、いつもなら一緒に仕事することを楽しみにしているのだが、

今日はちょっと…

しかも昨日から色々なことが重なっていたのもあって、急な仕事は勘弁して欲しいな…

極稀に、過去に2回だけだが、休日に呼び出されたことがある。

う〜今日に限って、その嫌な予感が益々…。

「これから急な取材が入ってね、ちょっと付き合ってもらいたかったんだけど…無理かな？」

あ〜やっぱり…。

で、今は何時だろう？

…う～ん、午後2時をちょっと過ぎたあたりだな…。

「夕方から彼女と会うことになってるんですよ。できればお供したいんですけど…」

「あ～ちょっとだけで済むと思うんだ。時間的には取材自体は30分ぐらいで終わると思うし…ちょっと来てくれるとうれしいなあ。」

あ～ずるいよお…

確かに取材自体は30分ぐらいで終わっても、ボクがこれから出版社まで行って、用意をして、取材が終わった後もボイスレコーダーの音声をパソコンに記録して、他の機材や書類をまとめるだけでも結構時間掛かるしなあ…

全部入れて2時間ぐらいか…なんとなかならないことも無いけど、昨日の今日だしなあ…

「…なんとなかならないかな？」

「…わかりました。じゃ4時までなら」

あ、言っちゃった…安請け合いてやつしちゃった…

「よし！じゃ、こっちでも準備して会社の入り口辺りで待ってるから！よろしく！」

プツッ…ツー…ツー…

あ～結局仕事にしちゃった…

どうするかなあ…先に美優に連絡しておこうかな？

でも4時までって約束したし…間に合えばいいから、連絡しなくてもいいか…。

と、こうはしてられない、この昨日から着たまの服を着替えて、セットしないと！

ということで、とっとと着替えて、とっとと髪をセットして、戸締りチェック…

よし！出発だ！

急いで車が置いてある駐車場に向かい、車に乗り込んだ。

乗りなれているようで気分が違う車に乗って、バイト先の出版社の前になんとか到着。

すぐに入り口のところで待っている斉藤さんを見つけた。

しかし、こちらに気づかない。

そうだった。同じ形のクルマとはいえ、色違いだし、なんせ見た目がボロいこの代車。

これではボクとは気づかないだろう。

ということで、ボクは車を降りて斉藤さんを迎えに行くことにした。

程無く斉藤さんはボクに気づき、車に乗り込んだ。

「グメンね！今日は休みだったのに来てもらっちゃって。」

「いえ、すぐ終わって事だったので、それならって。」

ボクはちょっと意地悪く言ってみた。

「ホント、すぐ終わると思うよ。先方は多忙なお人だし。」

あ、もしかして有名な人？

ボクはそう思った。

過去に何人か有名な人の取材をご一緒させてもらったことがあるのだが、大体あまり長い時間ではなかった。

せいぜい長くても1時間、大体30分から40分ぐらいで取材が終わることが多かった。

ということは、今回はなんとか相手のスケジュールの中に、この取材の時間を入れることができたということだろう。

う〜ん、ちょっと興味が湧いてきた。

ミュキ…じゃなかった、美優には悪いけど。

「あ、そこを右折して、すぐのカフェだから。」

斉藤さんが簡単に指示、程無くそのカフェを見つけることができた。

ボクは、そのカフェの前にクルマを停めて、斉藤さんと二人で店内にて先方を待つことにした。

待つこと5分ぐらいたらうか、その待ち合わせの人がやってきたらしい。

…

おおおおおお！

これは…今をときめく有名モデルの「山口 優」さんではないか！！

ヤバイ、これはヤバイ！

おもいっきり僕は舞い上がってしまった！

ボクが勤める出版社の専属モデルではないが、最近では多方面に活躍しているので、他の雑誌の取材も受けるようになったのであろう。

少しでも冷静になろうと、ボクは頑張った。

忘れずにボイスレコーダーのスイッチを入れ、録音モードにした。

ううう〜ん…それにしてもなんて綺麗な人なんだろう…。

ホント、ボクは取材中ずっと…「優ちゃん」に見とれていたのがあった。

服装はいかにも普段着って感じの服装なのだが、それでも充分にかっこよく見える。

こういうのが、すごいつて思う。

オーラって言うのか、そういうのを持っている人って、本当にいるんだなって思った。

少し外が騒がしい様な気がしたので、窓の外を見ると、既に優ちゃんの追っかけが来ていたらしく、ファンらしき女の子達が、騒ぎながら窓に張り付いているのだ。

流石は有名人気モデルである。

「えへんっ！」

おっと、斉藤さんが咳払いを…ちゃんとしないとダメじゃないか、ボク！

「あ、ご、ゴメンナサイ！」

「頼むよ～カスガくん～。」

「ホント、ごめんなさい…」

目の前で優ちゃんが笑ってる。

ああああ…恥ずかしい…

ただ取材自体は終わったようで、少しフリートークをしていたみたいだった。

でもまだ窓の外には、多数のファンらしき女の子がガラスに張り付いている。

そして腕時計に目をやった優ちゃん。

「それではそろそろ時間ですので。」

優ちゃんは席を立ち上がったので、斉藤さんとボクはお見送り、それぞれに挨拶を交わし、今日のお仕事終了～。

ボクも腕時計を見た。

…午後3時40分。

う～ん…猛ダッシュすれば、なんとか時間に間に合うな…。

しかもデート前に、いいネタもできたことだし…昨夜は色んな事あったけど、楽しくいけそうだ。

「よし、事務所へ戻るか。」

斉藤さんの一声で、ボクはクルマのところに向かった。

…

…

…車が無いんですけど。

…

車が止まっていたはずの場所を良く見てみると、路面にチョークが引かれて色々書いてあった。

…

やられた…駐車違反で持っていかれた…ものの30分強で…。

そういえば、外でなにかそのような声も聞こえていたような…

すごいショック…ホントにツイてない。

斉藤さんもその様子を見てすぐにわかったようだ。

「うわ～…ちょっとだけだったから、大丈夫だと思ったんだけどな…ゴメンね、カスガくん…。」

斉藤さんも相当凹んでいるのが見てわかる。

とりあえず、警察へ連絡をすることにした。

その問い合わせの結果、駐車違反金と駐車料金合わせて32,000円かかるとのこと。

「斉藤さん、この違反料金ってボク持ちなんですかねえ…」

ボクは、恐る恐る斉藤さんに訊いてみた。

なにせ死活問題だ。

32,000円なんて…ボクの1ヶ月の光熱費を上回る金額…ホントに死活問題。

「どうだろうねえ…ただ今回は、休みのカスガくん引っ張り出して…だったしねえ…後で総務のほうに聞いて見るよ。」

ほっ…うまくいけば、なんとかなりそう…お金は。

「でも、差しあったって車を引き取るならお金が要るから…って、カスガくんいくらある？」

ガーン…って、そりゃそうだよな。

ボク的に時間も無いことだし、すぐにもクルマを引き取りに行きたいところ。

で、財布の中身を一応見てみた。

…所持金、約7,000円。

「…7,000円しかないです…斉藤さん…」

あちゃー…と、斉藤さんがうなだれた。

当たり前だ…まだ学生で、一人暮らしで、お金無いんだぞ！

ボク的には「7,000円も」財布に入っているんだ！

…ということで、今回は全額斉藤さんが支払ってくれることになった。

たぶん、総務課への交渉も、積極的に行ってくれることだろう。

…自分のお金だしね。

早速警察署へと向かい、クルマを引き取ってきた。

斉藤さんは、先ほどよりもかなり凹んでいたようだ。

うんうん、仕方が無い、仕方が無い。

そのまま会社へと向かい、斉藤さんを降ろして、ボクは目的地へと出発した。

ふと時計を見ると、既に午後5時を少し回ったところ。

ヤバイ！なんだかゴタゴタしてたから、先にメールしておくのも忘れてた！

ボクは慌ててメールし、遅れることと、簡単に事情を書き、送信した。

どう頑張っても、ここからミュキの家までは、クルマでも15分はかかる。

ボクは慣れていないようで、基本的には慣れてしまっている代車のアクセルペダルを深く踏み込んだ。

ああああ！もう！

昨日あんなにゴタゴタしてて、今日もなんでこんなにゴタゴタして…

って、ボクが悪い部分もあるんだよな…

ちょっと落ち着かなきゃ。

あまり慌てると、ミュキにまた怪しまれるぞ。

今朝のメールみたいに、また腑に落ちない、そしてめんどくさい状況になりかねないし。

って、でも既に遅刻は確定しているし、やはりここはダッシュか…。

…って、なんでこういうときに限って、道路工事しているんだ！

ボクが走っている200mぐらい先で水道工事をしているのだ。

しかも片側一車線なので、警備のおじさんが警棒で案内…つまり片側交互通行になっているのである。

あぁもう！

でも少しだけ待つと、今度はこちら側が進めるようになったので、流れに合わせてクルマを走らせた。

よし、なんだかんだ前半飛ばしていたおかげで、あと5分も掛からずに着けそうだ。

って、既にかなり時間オーバーしているけど。

しかし、なんで今年はこんな誕生日なんだろう。

今までこんな激しいというか、ドタバタした誕生日は無かったぞ。

昨夜からあんなことがあって、今日は今日で休みなのに仕事をさせられ、しまいには駐車違反でレッカーまでされ…

あ、日中はゲームしてたんだ。

まあそれは置いて、忙しすぎるよ…全く…。

一人クルマを運転しながらブツクサ言っていると、ミュキの家の角までやってきていた。

ボクは軽くホーンを鳴らしてから、ミュキの家の前に車を停めた。

すると、1分も掛らずに、アパートの玄関からミュキが出てきた。

そしてミュキが助手席のドアを開けるなり…

「遅い！」

ええ、ヤキ入っちゃいました。

無論ここは言い訳を。

「いや～急に仕事入れられちゃってさ、しかもこのクルマが駐車違反でレッカーされるわで、すっかりこんな時間さ～。」

「うっそ！寝てたんでしょ！？」

「ホントだってば！いや、お昼過ぎまでは家に居たんだよ。でも斉藤さんから電話掛けてきてさ、これから取材付き合わないか～って。」

あ、そうだ！今日の取材相手！

「そうそう！で、その取材相手って言うのがさ、あの山口 優ちゃんだったんだぜ！」

「うっそ！ ぜえ～ったい嘘だね～」

「だからホントだって！ あ、じゃ、証拠見る！？」

実は取材が終わった後に、挨拶がてらにお願いして、自分の携帯と一緒に写真を撮らせてもらったのだ。

この画像だけは、なにがあっても消せないかも。

しかも自分で撮影したので、かなり密着してるし…うう、我ながらこれはたまらん！

っていうか、山口 優ちゃん、ホントにかわいくてやさしい！ たぶん「にわか」だけど、ファンになってしまった。

その今日撮れたての、「自慢の画像」をミュキに見せつけてやった。

その画像を見て、ミュキはびっくりしたようだ。

「マジ！？ マジで！？ どうだった？ かわいかった？ うわ～見たかったよ～。なんで言ってくれなかったの！？」

今度はミュキが興奮気味だ。

っていうか、いつの間にちゃんと助手席に座って、ボクの携帯を何度も見ながら、ボクの顔までも見ている。

ホントに信じられないって感じみたいだ。

そりゃそうだ、ミュキはファッションデザイナーを志しているのに、有名超人気モデルに興味がないわけがない。

しかもその画像が、ボクの携帯のメモリに入っているのだ。

「それが行くまでボクも知らなくてさ、逢ってボクもびっくりだったよ～。ホント、ミュキにも逢わせなかったなあ。」

「うわ～…カスガずるいよ！ カスガばっかり…あ…」

突然ミュキが口を閉ざした。

そして少し間をおいて、ミュキはボクに話しかけた。

え、ミュキ！？

…ヤバい！？

「…いつ知ったの？ あたしがミュキだってこと。」

ボクのクルマ…じゃない、代車の中は、一気に陰悪な雰囲気になってしまった。